第六天
土蜘蛛
舎利
小鍛治
石橋

九

特116
713
270
180

始

特116
713

三月　五番目又初番ニモ

第六天

位破急

前シテ　女　後シテ　第六天魔王　前ツレ　女　後ツレ　素盞嗚尊

所ハ伊勢　ワキ　解脱上人

脇　大口僧　ワキツレ二人　同断

ワキ次第 こゝろの花も開くる 向ひて〳〵大神宮

ましまするを 詞〽是ハ解脱と申沙門

にて候我いまだ神宮に参らず候程

に此度思ひ立伊勢參宮と志し

候 抑も九重を立出て 末は

吉野の山櫻 さかりの瀧河 是ぞこの

3. 5. 20
内交

太夫
面増女、着附
腰巻、水衣、襷帯
扇指、榊持
ツレ
シテ同ジ

ゆくも帰るも逢坂の、杉のすぎがてに、
浪よする湖もうち霞み、やうやう行けば、
鈴鹿路や、まだ遠き都も程も遠く度
會の宮に隠れなき、神路山
御裳濯川のそのみなかみに着きにけり
乃末清く隔てなく、永き代迄を仕へ
まことに曇なき恵ぞ頼もしや　渡

せば、ちはやぶる神もかましくぞ祈りそそら
ば、是正直捨方便の誓ひあらたなりとぞ
かやうに見えて、古松枝をつらね老樹緑をそ
へ、誠に是上求菩提の相を表し
皆鶏りし宮居なれ、神風に心安
くぞ覚えける、桜の宮の花ざかり
うく、白雲の立ちまよひ空さへ白

ふ月よこ来る影も長閑にて
絶えせぬ道の芸に行かふ袖の花の
香に集ふ心の氣も乱れなく
是なる法侶はいにしへより代々に清
みそぎぞ　是は都方より出て然
いふて和光同塵の本地出し結縁の
始め濁世の衆生まもらんぞ神力の妙楽をと

豊さかんや神秘を妻かへて結へ
やまとの人芸いひのや念比よ語し奉り
きよむるを出て其入清き豊濯川とい
つへ倭姫の命七百余歳ふ至る遠宮居
神寺おわします　然るべ当国二見
乃浦よあがり然其の方がれ結び
し五十鈴川より流し来より此豊濯川と

●居クセ

げにやありがたき神社も数々に。仁の御宮うつしふ
なしめて下津岩根に宮柱ふとしきま
たてゝ。日神月神もあらはれやはらぎ
ゐを拾ひつのをば。枝垂たちぬる御神高
天乃原そのかみ昔より。今もかはらぬ
神徳乃。末までの方便を語るも。いで

●コゝヨリ立

法くさまのあふぎてくも。猶あまり

何とかくれ恵をされしあまべ。頼めや頼め
神の告。末孫四海を護持するぞ。法の障
碍有べしと夢に身ありてやとて。かの
久しき世にも失ふまきり。斯く神謀
ふしきせ害の所為一ふ。繊に大魔をさへ
くへり。風雨雷電肝をあかし。六種の震
動して夥しや。大癋　神是れ仏法を破

後太夫
面　長霊癋見
赤頭、輪冠、厚板
半切、狩衣或ハ
法被
大唐団扇持

抑そも〳〵第六天の魔王とハ我事なり
抑又佛奉ハ誰ぞ六天又ハ煩悩の
悪魔陰魔死魔天子業魔
其外諸数ちやうりの道場障碍なす
群鬼ハ撰ぐなり其時解脱舎
當して観念がれしさまバ不思
議やまたば空より出給素盞嗚あらハれ

ツレ
面　霊神ノ類
黒垂、透冠、厚板
白大口、単法被
帯剱、白杖持

出給へ里即それを罷出給ひ即
持ちの鉾罷出給ふべきためにいでき地六
天なれども恐れ給ひてぞ見えて出けり
さらば素盞嗚もいり給ひくて
寶棒を取直しうちむとぞふみちがひ
須弥よあがらむとするをとゞめ大地に
ふせぐ息敷ど不昔は見ぬを給へべうよ

是非出て来る所にしやと誓ひをなさば恐る
るとも云ひあへずらせ給ひ。魔王も通力を
失ひ果てく。魔王は通力つきて果てそう
に流れて失せにけり

舎利

季不知　五番目

位破急

前シテ　里人　ツレ　韋駄天
後シテ　足疾鬼　ワキ　僧
所ハ　京都　泉涌寺僧

作物
一畳臺、舎利臺
脇　着流僧

是ハ出雲国見保乃関より出たる僧
にて候。我いまだ都を見ず候程に此たび
思ひ立洛陽乃佛閣一見せばやと存じ
候ひし　朝立や雲やゆく雲乃
出雲路く心も遥る旅の跡乃ちる越も重
なりて都にはやく着きにけり日を

塵ちく我ハ国々を廻りて都に着て候まづ
名なたる東山泉涌寺へ参り大唐よ
り渡りきたる十六羅漢仏舎利
ども拝まばやと存候△是成寺な
泉涌寺と申ぞたんだ寺守ハ人に多く
案内をも乞ばやと思へバいやこれへ入ん
何がしと御寺ぞ　早々遠の田舎

よりまかり出たる僧にて候當寺ハ仏力を家
及び候て参りて候大唐より渡りたる十
六羅漢仏舎利をも拝ませて申度候
ヲカシ　安き間の事なれて参りかかる御事にて
申事叶ひ候但今白波御舎利の位
出なく候我ら當番にて唯今戸
を明けちりをとくべく鑰を揃て參らせ候

然に此舎利もと所律を有しべきを度三門
に登りて十六羅漢ども拝まり給ひけ
拝し北方へ所出しかうしさうと上戸
を開き申て仏能を所収へ荒城し
やに供たし奉り作べし　宮やうやうとし
て何ら都乃愚あるべきなれどもすさら
霊験あらたなる仏舎利を拝申事

乃貴けよ良きおん身疾鬼が大集して五葦
諸天をりぞし給仕ぎんちあら斎持者
牙舎利乃所相好感激所に銘ぜれぞや
一心頂礼萬徳圓満釈迦如来　分身舎
今うをかけ世のうちしてまゐあり
ある佛舎利を拝む事乃かうきを
何よたとえんおも深き油もぬらば

太夫
面平太、類黒頭
着附衣、扇

寂しく

シテ上 有がたや仏在世に生れぬ所
時去り法乃声をも耳にふれ又は法値遇
乃結縁に一劫をもうかむ浅からぬ
二世安楽乃心をうるも後五の時代なれ
ど更に猶執心の見仏乃縁ならし
名もきくる時節の来れ　我仏前に観
念し寥々とある折節に御法をも要む

声をもありがたくの人会の海まうけぞ
シテカカル 是迄此寺乃あたりに住着なればこそ人
なる法の御縁をも受て宝に立する計
あり　よし説とてもその上仏舎
利をも拝まん為なれば同じ心ぞ我も猶
シテカカル ヨワク 我なれも今幾人　而も又都乃邊
東山なれやこゝに流れきまれ峯あらしや

上歌

月雪の、ふるき寺井も水澄て、ふく
庭の松風、更る夜の、鐘の声まても
心耳をすます夕かな、峯の松
谷の水音、澄渡る、岸も法を唱ふらん
く、仏法あれば世法あり、煩悩あれ
ば菩提有、仏あれば衆生もあり、善悪又不
二なり、然るに五百歳の佛法

●居クセ

然るに末世乃折をえて、西天唐土日域に
時至りて久かたの、月の都なれや爰に
仏法流布乃志るしとて、佛骨を納め
給ひし、なかにも目前の好き所の影向、舎
利ある殿かな、然るに仏法東漸を
て、正に如来四菩薩の皆日域に地をし
めく、衆生を済度給へり、常住霊

山乃秋の空わづかに二月に臨んで亀
をきし泥洹双樹の昔の庭あとをとゞめ
いろく臈ちとうつり経や仏舎利乃御寺ぞ
在世ちりぞれてや鷲鳥乃たゞ山も住世
乃みぎんによりて草木も法乃色ちを見せき
ぞれ仏法をゆうりして今まさきびしく
まき夜もすら月ぞうる社もすあれしぃ孤山

乃松の間よりあらく白毫乃秋乃月かげ
兆しそとし碧海の波乃よるよるまで羅漢の
暁乃雲をひく光乃きざしたちぞ御経る
のたゞ山嶽もそう人ぬなかつぞうしあやは
まさに目おあり乃舎利を拝まん有難寺ぞ
貴かりける　不思議中なか御身にまはる
そらうか忽雲り堂前に轟く稲光でき

そもいかなる事やらん　シテ詞〽今は何をかつゝ
むべき其古への足疾鬼が執心残つて此
舎利に望みありゆるし給へや御僧達
ワキ〽言ふかと見ればすさまじや面色かはり
鬼となりて　シテ詞〽舎利殿に臨みつゝ
のごとく　地〽金棺を　シテ〽宝座
を押して　栴檀沈水乱りての

後太夫
面シカミ、赤頭
着附、半切
法被、玉持

ツレ
面雷神、黒垂
走り天狗、着附
半切、側次
打杖

〽煙は立ちのぼる雲煙をたてゝ稲妻おほき
光りに紛れてそれよりも足疾鬼
とは足もはやき鬼なれば舎利殿に飛びあ
がりのまぎれしかるゝ人目のうち
めでたき御手に牙舎利をとつて天井を
蹴破り虚空に飛んであがると見えし
この行方もしらず失せにけり

中入　イロエ　早笛　章咲天上　サニリ

仏法をば守護しまする韋駄天とハ我に
あとあり。爰に又足疾鬼とて外道控
世尊の執心残りて仏舎利をぬすまんとつけ
ゆくしばし遂ふのがれて牙舎利
おひてく持ちしを いやかるおまじとて仏
舎利を取りもちこれあるを上月欲界
色界無色界へ他化天やまて天他化

自在天まで三十三天よりのぼりて帝釈
天遂にあがれば梵王天より出であひ
給ひて其の下界に退下もたへ
ゆく足疾鬼も前は天地を塞を
て疾鬼も屋をまくるるとしらば
ましめがるを韋駄天立ちよりほうぼう
上げて疾鬼をば大地に打ふせて首を

かまへて舎利を渡さじと、さしもに猛き足疾とせめ
給へば舎利を捧げ、韋駄天は舎利を指上げ帝釈の
天へ舎利を手渡しければ仏前にかへり給へば
さしもに猛き足疾鬼の足弱車の
力も尽き心も消えて、ちりぢりに
失せて行方も知らずなりにけり

土蜘

七月　五番目又ハ二番目ニモ

位破急

前シテ　僧　　後シテ　土蜘蛛　　ツレ　頼光
竹八　前　京都　　　　　　　　　小蝶
後　大和　　　トモ　頼光従者
　　　　　　　ワキ　独武者

作物
一畳臺

ツレ女　着流

トモ
素袍男
太刀持出ル

ツレ女次第「浮き立つ雲の行方をや。浮き立つ雲の行方をや。風の心地を尋ねん。

サシ「是は頼光の御内に仕へ申す。小蝶と申す女にて候。さても頼光例ならず悩ませ給ふにより。典薬の頭より御薬を持ち。頼光の御所へ参り候。いかに案内申し候。

トモ「誰にて渡り候ぞ

頼光
風折烏帽子
着附、大口、扇
葛桶掛衣

女「典薬の頭より御薬を持ちて胡蝶が参
りたる由申候へ　トモ「心得申候御機嫌
を以て申上候べく候　頼光サシカヽル「こゝに
きえかしこにむすぶ水の泡のうき世
に廻る身にこそありけれや人知ぬ
心は重き小夜衣の恨むかたも
なき袖の上に露のふかきおもひの郡

トモ内「いかに申上候典薬の頭より御薬を
持ちて小蝶の参りて候　頼光「此方へ来れ
と申し候へ　トモ「畏て候こなたへ御参り候へ
女「如何に申上候典薬の頭より御薬を
持ちて参りて候何と御心地は何と
御座候ぞ　頼光「昨日より心もよわり身
も苦しみて今は期を待つばかりなり

女上カル

いやくるれハ苦しからじ。病ハ宿

らぬ身をあらそひあざらぬ療治まよ

ひらくはかなく晴るゝ為に苦しき世

の中に　思ひ初しも桜にて

名もとまりぬ貴風く。境も志

らぬ有桜の時乃ひゞるをも覚え

無縁の心ろうれや心得てんぞ

そろまして思ひつゞむれバ胸もとくれ

しむる涙となるぞかなしき

太夫　沙門帽子、着附白大口、雷今ハナシ　水衣、鳥巣持

シテ一セイ　半越てサラリ　ツヨク

月清き夜すがらもみえん雲霧れ

ぞ雲れ。心の邪は頼も心地ハ

何とか房ぞ　不思議やな淵

房の僧形乃深更まで我をとゞ

ぽそれいつれ覚束なか

シテ　愚かなりや。

おやこゝふにそわづらはせてかざしの袖こそ

宵なりけりさゝがにの　蜘の振舞か

ねてよりしらぬとはに我近づく

姿は蜘蛛のごとくなるが　かくるや

千筋の糸筋に　五躰をしめて身を

苦しむる　紀まと見るよりも。化

生をみるよりも。枕に有し膝丸

脇
折烏帽子、着附
白大口、縷直衣
少刀、扇

抜ひらきちやうどきればそむくる

所をつゞきざまにあしもためず

薙ふせつゝえたりやおうとのゝしる声に

急にかたちはきえて失にけり

御声は高く聞えて程に馳来し

らくゆ行とふたるにゐてこぞ

いちくも早くきたる者にぞあらう

乗り給へ語つたへきかばべし。偽も 口

我が邪見なりけれどそれしらぬ、僧形

乃まゝなり。我が心地もさとふ。行者成ぞと

尋ねば。我せこがくべき宵ありおゝがに

乃。蜘蛛かるまひる様く志るしもやとは

古哥をつらねば。はなはちモアべがりの

蜘とちあ(ツメ)く。我は手筋乃急ぎくり

うきしも。枕子なし膝丸ふとく切ふ

生の我が佐まる乃者とちくうきのきんくや

うまう物し也。是と中しも編よ、剣(ツルギ)

乃ゐとくと思ひば、きゑより膝丸を

蜘切と名付られ、あんぼう亭おゐ成

るりはくいあきか　(ワキ)言語道断　今

にもじめぬ君の御威光、剣乃ゐとく。

かのくもを追て見失ひし事は
てんまん御太刀つきの跡をみれば
おびたゞしく血乃ながれければ血をしるべに
へ化生乃者を退治仕らばやと存候
作物 山
後ワキ
乱髪ヾ白鉢巻
法被、タスキ
太刀
脇ツレ 二人
同断袒シ法被
ナシニ側次着ル
心得申て候
ワキ 畏て 中入 早鼓 後ワキ 立衆 サラリ 去程に土も木
も我大君乃国なれば、いづくか鬼乃やど
りなる。ワキ 手を附独武者、土蜘の塚
にむかひ大音上て云やう是は王土にも
住ながら頼光乃御内に其名聞えたる
独武者也、いかなる天魔鬼神なりとも
命をとらんと此塚を崩せやくず
せと、よばはりかけてあまたの手に
つき武士が塚をくづせば
塚の内より火焔を

後太夫
面黒癋見、赤頭
着附、半切
法被　當今ハナシ

放ち水を出しとはいへども大勢崩すや
古塚に怪しき岩間の陰よりも鬼
神の形は現れたり　汝知らずや
我昔葛城山に年を経し土蜘の
精魂なり猶君が代に障をなさんと頼光
に近付き奉れば却つて命を断たん
とや　ワキ上　其時独武者進み出て汝

王地に住ながら君を悩ます天罰の
剱にあたりて弱るのみか命魂を
たゝんと手に手を取組かゝれば
蜘蛛の精霊千筋の糸を繰ためて投
げかけ投げかけ白糸の手足に纏はり五
体をつゞめて倒れ伏してぞ見えたりける
ワキ下　働　然りとはいへども神国王地の恵を頼み

ば、大蛇も中にて乱して大勢乱じ吉がかりけれバ
剣を抜きもちまた忽ち乱るゝ所を寄せ
に切伏せ大蛇の首打落して悦び
きて都へとこそかへりけれ

季不知　五番目又ハ暮初番ニモ

小鍛冶

位破　前シテ童子　後シテ稲荷明神　ワキ三条小鍛冶　ワキツレ橘道成
所ハ京都

大臣　前折烏帽子　著附、白大口　狩衣、扇

脇　折烏帽子　着附、白大口　直垂、小刀　扇

大臣ワキツレ 是ハ一條院に仕へ奉る橘(タチバナ)の道成(ミチナリ)なり
抑も今夜(コンヤ)帝(ミカド)不思議の御告ましますに
より三條小鍛冶宗近(ムネチカ)に召て御剣(ツルギ)
うたせらるべきとの勅諚にて候間
宗近が私宅(シタク)へと急ぎ候いかに此屋の内
に宗近が有か　シテ 宗近とハ被仰候て渡

候ぞ 大臣「是ハ一條院の勅使にて候ぞ
とよ抑も帝今夜不思儀乃御告
ましましにより宗近に御剣を
うたせらるべきとの勅諚なり急
で仕り候へ 早「宣旨畏て承りさやう
に御剣を仕べきよしハ我におとらぬ者
相鎚を仕りて社御剣も成就すべけれ

ば是ハ名角の臣を事をも申合たる
ものなかりけり 大臣「宗近が申所ハこと
わりなれども帝不思議乃御告ま
しませば頼母敷ぞおもひつゝはやく領
掌申べし [illegible] 宣旨ありければ
早「此上ハ名にも宗近が進
退爰に極りて御剣乃刃も乱れて

こゝに成りぬ。思ひよらずば政道の、直ぐなる
御代の御代なればこそ、斯かる奇特に宵
やまむぞそれの、頼むぞ心深く

ワキ　言語道断の大事を仰出されて
候ものかな。末の世には神力を豊
の宮まゐらでハとても甚だ某が氏の
神ハ稲荷の明神なれば、是より

太夫　面 慈童、黒頭　着附 水衣、扇

直に稲荷に参り、祈誓申さばやと
思ひ候。シテ　なふなふあれなるハ三條
の小鍛冶宗近にて御入り候か　ワキ　不思
議やな、さもありげにも知らざる人の、我
名をさして宣ふハ、いかなる人にてま
しますぞ　シテ　雲の上なる帝より
剱をうちて参らせよとの、汝に仰せあり

よりて　ワキ「かかれば社それに續きても猶
ほく不思議乃御剱乃勅
を唯今承りて候。さやうの事をも志ろし召
されける。如何なる人にてましますぞ、不審なり
シテ「いかに不審はさる事なれども我乃
苦きハ、人壽人色も　ワキ「天に聲あり
地にひゞく　上　壁に耳岩の物いふ

世中に隠れはあらじ、さすがにも
雲井乃上乃御剱乃光りハ何かくら
からん。たゞたのめ此君乃恵みによらば
御剱もなどかは心に叶はざらん
世に出でらるべき　クリ　地上「それ漢王三尺
乃剱。居ながら秦の乱れを治め又
煬帝がつるぎは。周の代をたもつし乃

ひとりをぞそへり。又玄宗皇
帝乃鐘馗大臣も剱の徳乃寃魄
を。君の邉に仕へたり。魍魎鬼神
にいたるまで剱乃威におそれ恐き
て其冠をおのが頭に戴き漢家
が朝におゐて降らざれ威徳申
になだぬ奇特とかや。上我朝乃

居クセ

其はじめ。人王十二代。景行天皇詔
乃ほあ名をば日本武とすしが。東夷
を退治し勅をうけ。関乃東を巡
ある東の猿乃みちまにまに。伊勢や
尾張の海づらまた浪とも海る
事よとうゐやまぢ我も歸るおい
ぶれ袋手にあらめやと。思召ぐを

そくわほとみ、家やうしこれ外難
ひろ凡馬が巌門よ碑まつる
は涿鹿の川となりて紅波楯を流し
し數度に及べば夷も甲を脱いで
戈をふせて降参を申しけり尊
は御宇より法将場をはじめ給へ
王法を補佐し世をしろしめしける代事

あれぞ四方のみちもみな枯野の遠
山おろしの烈落雷も轟ちりを捲
志れ東四方をかこみ枯野に火を
み炎ともを猛煙あがりにも見えざりけり
敵せめかゝるところをうけて火焔焔に
●ミヤヨリ立
放ちてかゝりければ尊は剣を
拔くあたりをはらひたちまちよ

鶯もこゑちゝ聞きて四方の春を知らず
さらへば此精霊あらはれ出て
猶守らせ給ふも此世ぞかし天下太平や
また地はみちくて猛き武都も高き敵を
やすくべき万端の夷どもはいまたちまち
和らぎしかば君の恩四海に如し
をさまりて人家戸ざしもさゝぬ世

も草生えず故とぞや崖て浅う
川舞て其瑞相の御剱もいつで
うれはおとさるべき御代の家の宗の
よく易くも思ひて下向し給へ
漢家本朝におしなく剱の威徳附りて
とりそれ祝言なる御身は如何
賊人ぞよし頼とてもかゝる頼め

ざるを勅の御劔をうつべき壇をも飾り
給ひつる時我をも御待ち候へ通力を
非凡の家にてかなふまじその時節
に参会て御ちからを添へ申すべし
まつゆふべのかげの雲の稲荷山行程も
しらず跡なくなりにけり宗近勅に
隨ひ則壇にあがり不浄を

役脇
黒風折烏帽子
長絹、扇
作物
一畳臺 カナ床

隔つる七重の注連四方に本尊を掛
奉り幣帛を捧げ祈ぎまうく宗
近時よ隆く仁王六十六代一條院の
御宇に其職のほまれを蒙るまでも
是神の力にあらずや伊弉諾伊
弉冉の天のうき橋を踏わたり豊
葦原をさぐり給ひし御鉾より初

まりぞ乃ちからあんきむすそうぶかてく

ばしみだ尊者より以家天國につぎ此

子孫よ傳へいまに至り猶ぶらく

宗近私乃高名にあらず普天率土

乃勅命よりおりいのらバ十方護

冊若清浄神慮としれ宗近にちからを

合せてたび給へとて幣帛を捧

後太夫
面小飛出、赤頭
狐形輪冠ニ建
着附、半切
法被、槌持

たく天よ續ぎ頭、地よつき骨髄丹

誠岡の納受をしめし給へや謹上再拝

比上 引斷

いかにや宗近勅乃劔うつべき時

節ハ虚空よまもり頼めやたのもしや

たゞたのめ童男壇の上にあがりて

宗近よ三拜乃膝をくりして

御たる世の孫つとへば宗近恐

[illegible]
教への鎚をはつたと打てばちやうと
うちちやうちやうと打重ねたる
鎚の音天地に響きておびたたしや
かくて御剣を打奉り表に小鍛冶
宗近と打つ　神体時の弟子なれば
小狐と裏にあざやかに打奉る

御剣の刃は雲をみだしたれば天の村雲も
そもまたこれなれや天下第一の
二つ銘の御剣にて四海を治め給へば
五穀成就も此時なれやすなはち
汝が氏の神稲荷の神体小狐丸を
勅使にささげ申し是迄なりといひ捨てて
またむら雲に飛乗りて東山稲荷の峰に

飛乗る叢雲に飛乗り東山稲荷の峯にぞ
かへりける

四月 五番目

石橋

位序破急 前シテ童子 後シテ獅子 ワキ寂照法師 所ハ唐土

脇 大口僧

太夫 面童子、黒頭 水衣着流

ワキ 是ハ大江の定基といはれし寂照法師にて候我入唐渡天し彼方此方を拝み廻り只今清涼山に参りて候是に見えたるが石橋にて有げに候暫く人を待委しく尋ねこの橋をも渡らばやと存候

一セイ シテ 松風の花を薪に吹添て

遥く雲をしのぎて山路に　山路に
日暮ぬ樵歌牧笛の声人間万事様々
乃世をわたりゆく身乃有様物ことに遮
きる眼の前光の陰をや送るらん
遥かに山を遠く見て雲の波を立て
入るかの白き道乃谷の川おとも雨
とのみきこえて松風にこれや掲つ

て半日の客たりしも今身の上に流れて
まかりく　如何に是成山人に尋
ねまほしく　何をか御尋候そ
是成ハ承及ぶ石橋にて候か　さん候
これ社石橋よ　向ひは文殊の浄
土清涼山　能々御渡り候へ　扨ハ
石橋にて候ひけるぞや　さあらば身命

其仏力にはまかせて此橋を渡らうやと思
ひ候　暫く候そのかみ名を得給ひし
高僧達も難行苦行捨身の行にて
多くの月日を送りてこそ橋をは
わたり給ひしに　獅子は小虫をくはんとて
とても先いきほひを為すと社きけ我か
法力のあればとて行く事かたき石の橋
をやまして其に渡らんとやあやふ
し此御事や　謂をきけはか程やふ
尋常の行人は左右なう渡らぬ橋よ
ぞ　御覧候へ此瀧波の雲より落
て数千丈滝つぼまでは霧深うして身
の毛もよだつ谷深み　巌峨々たる
岩石に　わづかにかゝる石の橋　苔は

おありて見るたまふ手 渡しは目、
をうれ心をもや うつくあるいし
の橋くまり御慰きよ橋をやしふ
あゆきとめへ此橋みせてハ人ふをうち
ましてハ下ハ泥和をも去ら波の虚空に
ひとしれてやくもあやふしや目をうれ心をも
またえくと成おそりおぼろきの行人ハ思

居クモ

ひきよらめ陽らす 折も橋乃留れ御
物語以く これ天地開闢のこ昔乃雨露
をとうて国土を守る是則あめ君
が此橋をもつて 其外国土世界にあい
て橋れの前を通くみてく水波の難に
のがれ萬民とめ於世に至る家をも先の昔
橋乃徳とうや あうる此石橋は人

人間の渡せる橋にあらず。おのれと出現
して。続ける橋の。その名を石橋と名
付けたり。その面僅かに尺よりは狭う
して。苔はなはだ滑らかなり。長さ三丈余
谷の深さは千丈余り。上に
は滝の糸雲より懸り。下は
泥梨も白浪の音は嵐にひゞ

き合て山河震動し。雨土くれをうご
かせり。橋の気色を見渡せば。雲に聳
ゆる粧ひは。夕陽の雨の後に虹を
なせる姿。又弓を引ける形なり
遥に望んで谷を見れば。足冷しく肝消
え。進んで渡る人もなし。神変仏力に
あらずは。誰か此橋を渡るべき。向は文殊の

作物　一畳臺　紅白牡丹出ス

後太夫　面獅々口、赤頭　厚板、半切　法被

下 浄土に常に笙歌の花降りて、簫笛や
くきんくご夕日の雲に聞えき目前の
奇特あらたなり、しばらく待たせ給へや、影
向の時節も今いく程によもすぎじ 中入

上地 獅子とらでんの舞楽のみぎり、牡丹の
英にほひみちみち、大きんりきんの獅子がしら
うてやはやせやぼたんばう、ぼたんばう黄
きんのずゐ顕れて、花にたはむれ枝にふし
まろび、げにも上なき獅子王の勢ひ
なびかぬ草木もなき時なれや、萬歳千
秋と舞ひをさめ、萬歳千秋と舞ひ納めて
獅子の座にこそなほりけれ

大正三年四月拾日印刷
大正三年四月貳拾六日發行

版權登録

大阪府西成郡中津町大字下三番七十六番屋敷
増補訂正相續者　大喜多信秀

大阪市北區源藏町十番地
發行者兼印刷者　富永久世

大阪府西成郡中津町大字下三番七十六番屋敷
發行所　常磐會

270
180

終